

考える。つまり生業・年齢・性別を軸にして主体が変われば、開発・発展と文化の定義は変化し、両者は対立もしくは調和の二項対立で考えられるものではないのである。内発的發展の実現には、多様な主体の対話が不可欠であることを筆者は主張する。終章ではこれまでの要点を整理したうえで、内発的な社会開発に必要な5つの条件が提示され、本書は締め括られる。

本書の内容を概観したうえで、まずは評者なりに本書の気になった点を挙げてみたい。本書では広範な分野で論が展開され、ひろく開発と地域文化に関して詳細な議論を学ぶことができる。その一方で、読者が開発の変遷や文化の概念、タンザニアで実施された政策について、基本的な知識をもちあわせていないと、本書前半で取り上げられる理論的な枠組みと後半のフィールドの事例を結びつけて理解することが、少々難解となるかもしれない。

著者は248名からの協力を得て調査を遂行しており、協力者の多さは著者が調査のなかで地域住民と良好な人間関係を築いてきた結果であると思われる。しかし、本書ではグループ討論の一連の会話や調査地域の人々の語りが十分に描ききれておらず、評者としてはもっとリンディ州に生きる人々の声を聞きたいと思った。ぜひとも、年長者と若者のあいだで繰り広げられた祭祀に対する談論などを緻密に記述し、開発と文化を受容・抵抗することに対する地域住民のリアルな感情の揺れ動きを描きだしてほしい。

いくつか評者の感じた細かな点を挙げた

が、これらは本書の価値を決して損ねるものではない。用語の解説や文献レビューは重厚であり、非常に勉強になる。タンザニア研究者や国際協力を志す人には、必ず手にとってほしい1冊である。本書では理論とフィールドワークの双方から、著者の違和感に基づく問題意識について、丹念にひもとかれ、開発と文化をめぐる多様な状況と内発的な社会開発に必要な条件が明らかにされる。問題が複雑に絡みあう現代社会において、民衆を主体とした社会開発をおこなう姿勢は、すべての人々にとって必要であり、本書は持続可能な開発目標が掲げる「誰ひとり取り残さない社会」の実現に寄与する視点をもたらしてくれるだろう。

引用文献

米山俊直. 1990. 『アフリカ農耕民の世界観』弘文堂.

Sonam Kinga. *Democratic Transition in Bhutan: Political Contests as Moral Battles*. London and New York: Routledge, 2020, 306 p.

石内良季*

本書は、ヒマラヤ山脈の南麓に位置するブータン王国（以下、ブータンとする）において、君主制と民主化の変遷が、主に2007～2008年にかけて行なわれた選挙とその後の展開にどのような影響を与えたのかを分析

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

することを通じて、ブータンの政治と社会の実相を論じる研究書である。

本書の前半部分は、著者であるソナム・キング氏が2010年に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科へ提出した博士論文が基になっている。著者は大学院在学中の2008年にブータン東部タシガン県から国家評議会（上院に相当）議員選挙に出馬し、二期にわたり評議会議員を務めた。そこでの著者自身による政治参加と、それに伴う参与観察及び議員活動で得られた民族誌的資料に基づいて書かれたのが本書であり、その際、著者が着目したのが選挙という出来事である。それは、選挙がブータンの政治的ダイナミズムを捉え、政治的实践とその意味を分析するための機会を提供してくれるからである。

本書は序章、終章に加えて、9章から構成されている。以下、各章の内容を概観する。

まず、本書の序章では、ヨーロッパやアジアの君主国家における民主化過程との比較から、ブータンの民主化過程が大きく異なることが指摘される。その最も重要な点が民主化における君主制の役割である。ブータンの君主制の正統性は、1907年に聖俗双方からなる国民の代表と交わした「契約 (*genja*)」に基づいており、社会経済的發展や政治改革をすすめる現代的な機関として機能したと著者はいう。ゆえに、儀礼的象徴として正統性の根拠を神聖さに求め、近代世界のなかで生き残るために立憲君主国となった他国の君主制とは異なると論じている。そのうえで、民主主義が君主制に取って代わり、国民国家の上に成り立つとするベネディクト・アンダーソ

ンの主張にたいして、ブータンの民主主義とそれに続く議会選挙は君主制の上に成り立っていると主張する。

第1章では、憲法が「国王からの賜物 (*soeltra*)」であるとする言説が、憲法草案の発布にかけて生み出される過程について分析されている。憲法草案のコピーを全世帯に配布し、地方行幸先で国民との徹底的な協議を行なうことなどを通じて、憲法の正統性のありかは国民にあると主張する国王に対し、憲法草案が賜物であり神聖であるがゆえに、改正はおろか、その内容に疑問を呈することもはばかれるというモラルの問題が引き起こされたことが述べられている。

第2章では、国会議員選挙を管理する選挙管理委員会 (Election Commission of Bhutan: ECB) の設置とその制度、選挙法について説明されている。2008年の国会議員選挙に先立ち設立されたECBは、自由で公正な選挙と国民投票の実施を目的とする独立した非政治的な機関である。しかし、「民主主義の守護者」(p. 56) という役割を自らに課したECBは、有権者への教育や選挙関連の不正調査を実施する過程で、政治空間を管理する機関というイメージを生み出してきたことが示されている。

第3章では、国会議員選挙に先立ち行なわれた模擬選挙の様相が示されている。模擬選挙の目的は、実際の選挙の技術的・手続き的側面について有権者を訓練することであった。一方ここでは、模擬選挙の結果が予想に反して、国王を連想させる色（黄色）を用いた模擬政党 (Druk Yellow Party: DYT) が

勝利した結果とその影響が分析され、「ブータンの政治的想像力における国王の中心性」(p. 99) が再確認されたことにより、実際の選挙で王室のイメージが利用されるようになったと論じている。

第 4 章では、著者自身による国家評議会議員選挙への参加が描かれている。政党への所属が禁止されている評議会議員は、選挙において選挙区となる地域との関係が重要になる。候補者は、「政府と国民の架け橋」(p. 104) であり、有権者にとって地域の発展や生活を保障する重要な存在である。ここでは、地域のさまざまなアクターが選挙プロセスに与える影響と、それに伴う地域間の敵対関係や権力闘争が選挙によって再構築される様相について述べられている。

第 5 章では、国会議員選挙（下院に相当）において、DPT (Druk Phuensum Tshogpa) が PDP (People's Democratic Party) に圧勝を収めた背景について分析がなされている。政策やイデオロギーという点で両党に大きな違いはなかったにもかかわらず、このような結果になった要因について、著者はモラルという側面が重要であると指摘する。DPT は、過去の社会経済発展の成果を国王によるものとし、国王を想起させるシンボルを上手く用いることで、モラルな政党という自らのイメージを構築した。他方で、演説やゴシップなどをとおして汚職や腐敗といった「民主主義の落とし穴」(p. 161) を、直接言及しないまでも暗示的に PDP と結び付け、対極的なモラルのない「他者」像を構築したことで、DPT の評価が相対的に高まっていった

と論じている。

第 6 章では、PDP の敗因を第 5 章とは異なる観点から論じている。第 5 章でみたように、DPT が PDP をモラルのない「他者」として構築したことが、PDP の敗北に大きな影響を及ぼしたことは疑いの余地がない一方で、PDP の「金持ち政党」(p. 172) というイメージや候補者によるスキャンダルが政党の印象を悪化させたと述べる。また、ある PDP 候補者の父親が地域住民に好かれていなかったという地域的な問題もまた、有権者の投票行動に影響したと分析している。

第 7 章では、選挙後の DPT 政権が国民の支持を得続けるために、新たな物語が形成される過程が描かれている。ここでは、土地の下賜や王室プロジェクトの設立といった国王の特権を縮小させ、同等の権限を行使しようとする DPT 政権の試みが分析され、自らを「無力」(p. 202) と表現することで、力をもつ国王が新たな「他者」として構築されたと論じている。

第 8 章では、2013 年国会議員選挙における DPT の敗因と、敗北から 1 週間後の 7 月 19 日に行なわれた DPT の党大会について分析がなされている。党大会で DPT は、選挙が自由で公正なものでなく、王室やメディアによる選挙への干渉や、選挙中の外交関係が敗北の結果につながったとし、それらを含む 15 の要点を国王に提出した。しかし著者は、DPT の敗因には反政権派の感情や、第 1 回投票（本選挙へ進出する上位 2 党を決める投票）で脱落した他党の支持者からの投票の揺れ等の複数の要因があったと指摘する。ま

た、党大会の場合は、善対悪、無力者対有力者というこれまでDPTが構築してきた2つの物語を完成させることに成功したことを体現する「壮大なスペクタクル」(p. 231)として機能したと主張している。

第9章では、前章までみてきた政治的空間のなかで、国王がどのようにして政治の上に留まり、民主主義の強化を導いたのかが説明されている。国王に対する批判とも捉えられた2013年DPT党大会に対し、国王はそれに反応しないという選択をすることで、政治に干渉しない立場を貫いた。一方で国王は、敗北した政党との話し合いや、首相と両政党の国会議員に勲章を授与することなどを通じて、党派主義を超えて民主主義への貢献を奨励してきた。国王が民主主義という広範な関心ごとに焦点を当てることで、政治的課題を解決することができたと著者は指摘している。

結論では、これまでの議論を踏まえ、ブータンにおける民主主義の重要な要素は、民主化プロセスにおける君主制のエージェンシーと中心性であり、君主制が民主主義を受け入れるための土台になったことが述べられている。また、選挙によって生じた社会的分裂や不安感、第5代国王の戴冠や地方行幸、結婚式といったイベントによって国家の団結が具体化されたことで解消され、君主制が政治的想像力の中心にあり続けているとする。

以上が本書の概要であるが、ここからは評者の若干のコメントを付したい。

まず、本書の重要な意義は、政治に関する実証研究や村落でのフィールドワークに基づ

く研究がほとんど存在してこなかったブータンにおいて、長期にわたり、かつ自らが評議会議員に当選することで当事者となり、ブータンの民主化過程と君主制、社会と政治を内側から読み解いた点である。憲法制定の協議に始まり、模擬選挙、2008年・2013年国会議員選挙の実施とその後の過程を記述・分析することで、ブータンの民主化は、個人から地域社会、国会においても国王との関係を抜きに語ることはできないということが、明らかにされている。

他方で、本書を読んでいて評者が不十分だと感じた点が2つある。

1つ目が、王室同様に政治の上に位置づけられた宗教者による民主化への影響力である。2007年宗教組織法によって、ブータンのすべての僧は選挙・被選挙権をもたず、選挙活動への関わりを禁じられているが、宗教者の政治空間からの排除は容易ではない〔宮本2015〕。本書では、第3章の模擬選挙の記述において、国王を連想させる黄色だけでなく、仏教を連想させる赤や青もまた投票行動に影響したことや(p. 91)、選挙後の社会的分裂を改善しようとする著名な僧の発言(p. 261)などが記されているが、このような仏教の民主化過程における影響は、各章に断片的に示されるだけで、十分には論じられていない。これらの事例が示すのは、国王・王室と同程度まではいかないにしても、仏教、宗教者がブータンにおいて大きな影響力をもち、時にモラルの源泉となりえることであり、その点について厚い記述を行なうことができるはずである。

2 つ目が、国王による地方行幸と民主化の関係である。特に第 4 代国王が戴冠直後から継続的に行なってきた地方行幸は、数千人規模の人々を集める一大イベントであり、国民に「身近な国王」という国王像を形成する機能をもっていた〔石内 2021〕。本書でも第 4 代国王と王太子（当時）が、各地で憲法に関する協議を市井の人と行なうといった記述（p. 36）や、国王を「歩く国王（pedestrian King）」（p. 269）と表現しているように、国民の意識を民主化へと向けるために地方行幸がどのような役割を果たしたのかについてより詳細に描ければ、国王と民主化の関係について内容を膨らませることができるだろう。もっともこの点は、著者の今後の研究の課題ともいえるが、同時にブータン国王の地方行幸に着目してきた評者の課題でもある。

以上、本稿では、ソナム・キング氏による新刊本の内容の検討を行ってきた。「王国は時間とともに変わらなければならない」（p. 39）という国王の強い意志で進められた民主化は、同時に、正統性のありかという不変な国王像を強化するものになり、国王・王室抜きにブータンの民主化を理解することはできないことを本書は明らかにしてきた。その点において、本書は、君主制、民主化研究だけでなく、ブータン研究における国王・王室の重要性を改めて提起したという点で、学術的貢献は非常に大きいだろう。ブータン研究者だけでなく、君主制と民主主義の関係に関心をもつ他地域の研究者にも手に取ってほしい一冊である。

引用文献

- 石内良季. 2021. 「『開発とともに進める』国民の形成—ブータン国王による地方行幸の目的とその機能」『南アジア研究』31: 85–117.
宮本万里. 2015. 「現代ブータンの民主化プロジェクト—『政治的なもの』からの距離をめぐって」『現代インド研究』5: 149–165.

飯田玲子. 『インドにおける大衆芸能と都市文化—タマーシャーの踊り子による模倣と欲望の上演』ナカニシヤ出版, 2020 年, 258 p.

山本達也 *

本書は、インド西部のマハーラーシュトラ州で展開する大衆芸能タマーシャーの踊り子（以下、タマスギール）や多様な観客の実践に着目しながら、特に同州の第二の都市ブネーを舞台に、タマーシャーが大衆の欲望や都市のあり方を交渉する都市文化となっている現状を描き出した民族誌である。

序論において、著者は都市文化としてタマーシャーを捉える本書の論点を先行研究との対話から浮かび上がらせる。大衆芸能はインド芸能文化研究による「古典」と「民俗」の二分法によって無視され、タマーシャーに関する先行研究もまたタマスギールの視点に沿った記述や分析をしてこなかったと著者は指摘する。続いて、都市の現代的様相を理解するためには新興中間層のみならず庶民層も含めた多様な大衆が討議や交渉を展開する様相を捉える必要があり、多様な大衆の公共

* 静岡大学人文社会科学研究所